令和４・５年度
墨田区教育委員会　研究協力園

研究主題

たくましい幼児の育成

～乗り越える姿を見つめて～

令和５年１１月１５日（水）

墨田区立 立花幼稚園

研究構想図

社会的背景

「多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにするための基礎を培うことが求められる。」

（幼稚園教育要領　前文）

幼稚園の教育目標

〇心も体も元気な子ども
〈げんき〉

〇自分で考え、やりぬく子ども
〈やるき・こんき〉

〇互いを大切にする子ども
〈おもいやり〉

幼児の実態

- 新しい環境に興味をもち、自ら関わる。
- 困難を感じる場面で、譲る、我慢する、諦めるなどの姿がある。
- 少人数のため、穏やかに遊べている。一方で、友達同士で葛藤する場面が起こりにくい。

教員の願い

物事に粘り強く前向きに取り組んだり、困難や葛藤を乗り越えたりする、たくましい幼児に育ってほしい。

研究主題

たくましい幼児の育成

～乗り越える姿を見つめて～

目指す幼児像

困難に向き合い、よりよい方向へ向かっていこうとする幼児

研究のねらい

〇幼児のたくましさの育ちを明らかにする。

〇教員の援助や役割について明らかにする。

研究の仮説

幼児の心のゆらぎや乗り越えようとする姿を丁寧に読み取り、経験の積み重なりを意識した援助を行うことで、たくましさが育成されるだろう。

研究の内容

「たくましさ」とは

私たちが育てたい「たくましさ」とはどのようなものなのか。本園の幼児の実態、先行研究、参考文献などから、次のように捉えた。

積極性、前向きさ、柔軟性、回復力、粘り強さ、適応力、自己主張、自己調整など

「たくましさ」を支える要因

幼児が困難を乗り越えようとする時、乗り越えた時、その「たくましさ」を支える要因を多角的に捉えたいと考え、次の視点をもつこととした。

- **幼児の思い**
- **遊びや教材のもつ特性**
- **友達の存在**　・**教員の援助**

「たくましさ」とともに育つもの

「たくましさ」を、幼稚園教育において育みたい３つの資質・能力（幼稚園教育要領）から考えた時、「学びに向かう力・人間性等」にあてはまると、捉えた。３つの資質・能力は一体的に育まれるため、切り離して考えるものではない。

学びに向かう力・人間性等
「たくましさ」

知識及び技能の基礎　**思考力・判断力・表現力等の基礎**

事例検討を重ねて

見えてきた「ゆらぎ」の存在

幼児が困難を感じるとき、様々な感情や思いに心が揺れ動いていることに気付いた。

この「ゆらぎ」を丁寧に読み取り、「たくましさ」につなげていきたいと考えた。

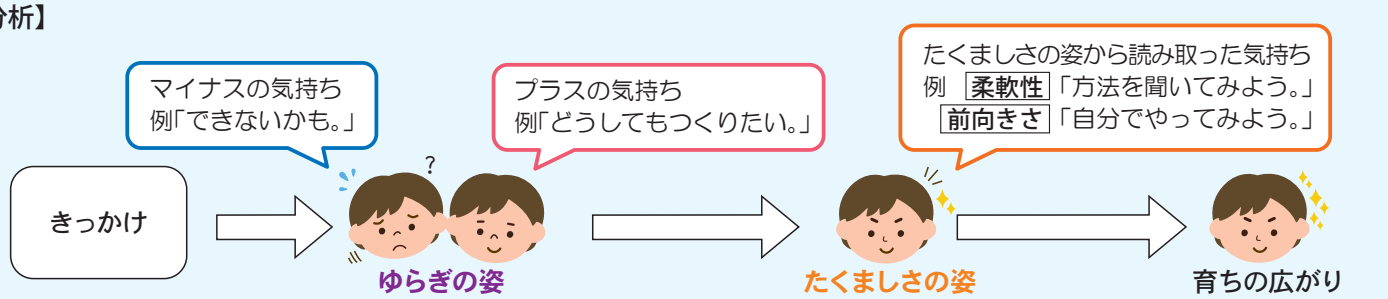
見えてきた「育ちの広がり」

「たくましさ」の姿が見られ、乗り越えた先には、経験が積み重なったことによる様々な姿が見えてきた。育ちが広がっていく姿も大切にしたい。

事例検討

実践事例を検討するにあたり、「ゆらぎ」とそのきっかけ、「たくましさ」とたくましさとともに育つもの（3つの資質・能力）や育ちの広がり（さらに経験できたこと）について考える。また、たくましさを支える要因や3つの資質・能力から分析していくことで、教員の援助の在り方を探る。

【分析】



★紫字…ゆらぎの姿
青ふきだし…ゆらぎの姿から読み取ったマイナスの気持ち
桃ふきだし…ゆらぎの姿から読み取ったプラスの気持ち
★橙字…たくましさの姿
橙ふきだし…たくましさの姿から読み取った気持ちを表すこととする。

たくましさを支える要因
[幼児の思い]
[遊び・教材]
[友達の存在]
[教員の援助]

たくましさとともに育つもの
3つの資質・能力

【考察】
教員の援助の在り方について考察する。

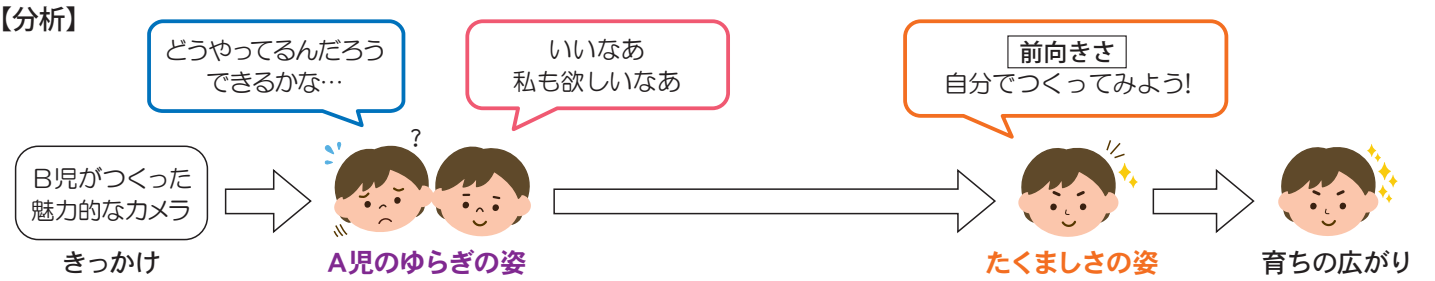
様々な事例を検討していく中で、事例を次の3つのカテゴリーに分類することができた。

事例 ～ゆらぎを見つめて～

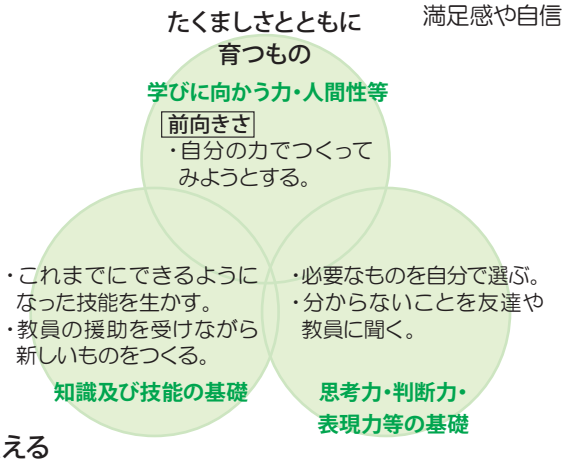
事例1　4歳児5月　前向きさ「自分でつくってみよう！」

A児は、様々なことに興味をもって取り組むが、製作の経験が少なく、難しさを感じると、「できない～。」、「Aには難しい！」と言って諦めたり、怒ったりすることが多かった。ある日、B児が空き箱や紙テープでカメラをつくっているのを見て、A児は、じっとB児の手元を見る。「どうやるの？」とB児に聞くと、B児は製作コーナーを指差す。A児は自分で必要な材料を持ってきて、つくり始める。教員はあえて手を貸さず見守る。時々、教員に「ここを持ってて。」、「これくらい（の長さ）でいい？」と手助けを求めながら完成させる。完成すると、「へへ、Aがつくった。」と満足そうに身に付ける。教員は「すてきだね。自分でつくれたね！」と認める。

【分析】



たくましさを支える要因
[思い]（ゆらぎの際のプラスの気持ち）
・やってみたい
[遊び・教材]
・これまで扱ったことのある教材
・必要なものを自分で選べる製作コーナー
[友達]
・面白そうなものをつくっている友達
[教員]
・見守りながら必要に応じた技能面の援助



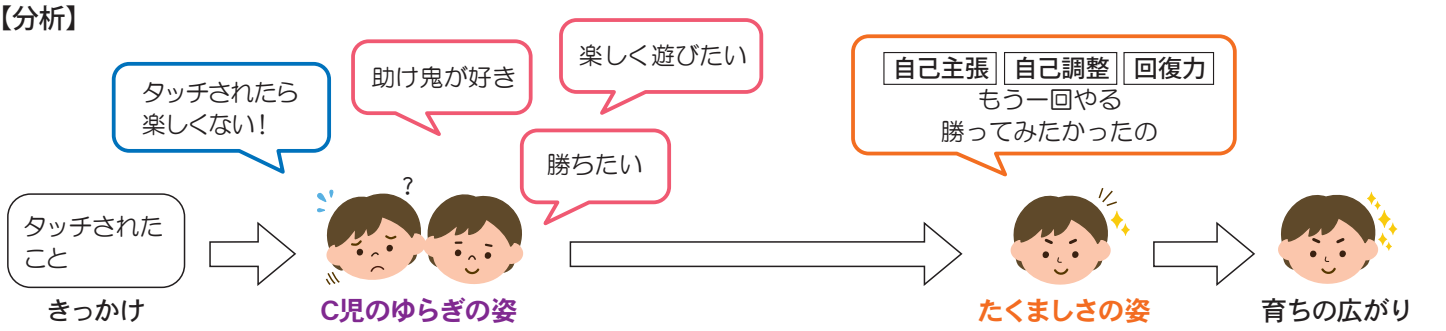
【考察】自分で扱うことができる環境の設定と見守りながら“ちょっと”支える

A児が友達のカメラをきっかけに自分でつくってみようと思えたのは、自分なりに関わることができる環境が整っていたからである。幼児の実態を丁寧に把握し、したいと思ったことにそれぞれの幼児がすぐに取り組めるような分かりやすい環境設定が大切である。また、一人一人が自分なりに取り組んでいる姿を見守りながら、求めに応じて支え、自分でできた喜びを味わえるよう援助していくことも大切である。

事例２　４歳児10月　自己主張　自己調整　回復力「もう一回やる」

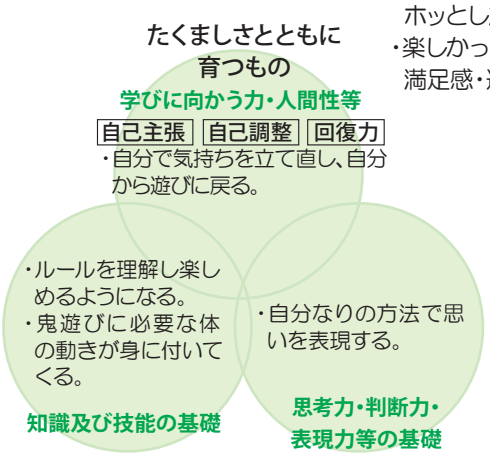
午前中に学級で初めて助け鬼をした日の午後、園庭に数人の幼児が集まり、助け鬼が始まる。C児も遊びに参加するが、鬼に捕まると泣き出し、遊びの場から離れた滑り台に上る。一緒に遊んでいたD児や教員が近くへ行こうとすると、C児は「来ないで。」と強く言い、泣き続ける。D児は、心配そうに、不安そうに見つめている。教員は、「今は一人で泣きたい気分なんだね。気持ちが落ち着くまで待ってようか。」とC児にも聞こえるようにD児に伝え、時々視線を送って見守りながら、少し離れて遊びを続ける。**C児は滑り台の上から、泣きながらもみんなが遊ぶ様子を見ている。しばらく経って泣き止んだC児は、「もう一回やる。」と言って自分から助け鬼に加わる。**教員が「Cちゃんおかえり。」と温かく迎えると、C児は、**「私は勝ってみたかったの。」と教員に伝える。**教員は、「そっか。さっきは悔しかったんだね。」と言葉を掛ける。遊びに戻ってから、C児は鬼に何度かタッチされてしまうが、教員から「Cちゃん、助けに行くね！」と言って励まされたり、D児に助けてもらったりしながら、遊び続ける。

【分析】



たくましさを支える要因

[思い]（ゆらぎの際のプラスの気持ち）
・助け鬼が好き　・楽しく遊びたい
・勝ちたい
[遊び・教材]
・助け鬼の面白さ
・落ち着ける場所や、戻る場所、気持ちを調整できる十分な時間
[友達]
・一緒に遊ぶ友達や心配してくれる友達
・みんなが楽しそうに遊び続けている姿
[教員]
・気に掛けながら、見守る
・思いを受け止め、共感する



【考察】自分の気持ちと向き合う時間を大切にする

これまで泣くことだけで自分の気持ちを表現することが多かったC児が、自分で気持ちを落ち着かせ、言葉にして思いを表現した姿を支えたものは、これまでも教員から自分の思いを受け止めてもらった経験や、遊び自体の面白さ、みんなが遊び続けていることであったと考える。教員は、幼児が自分なりに気持ちを表現するありのままの姿を受け止め、言葉にして共感し、幼児自身が自分の気持ちと向き合う時間を大切にしたい。そのことで、幼児が自分の気持ちを感じたり、安心して表現したり、気持ちを立て直したりする姿につながる。

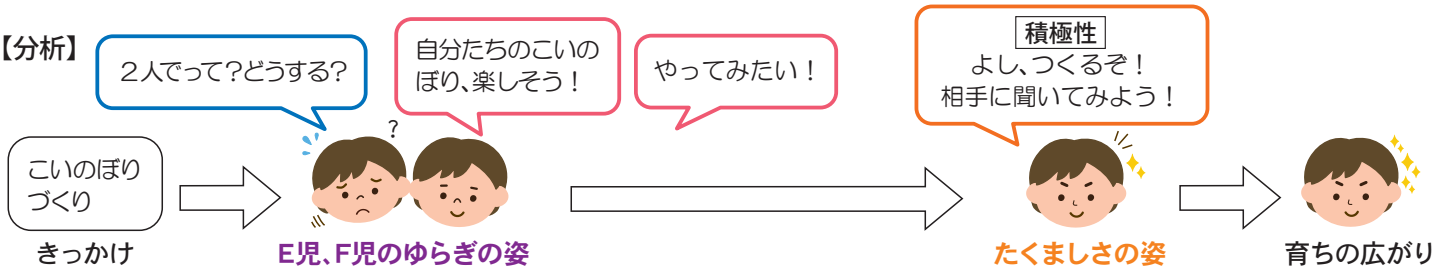
事例 ～教員が意図をもって～

事例３　５歳児４月　積極性「２人でどうする？」

こいのぼり製作において、教員は、友達と一緒に取り組む経験をさせたいと考え、どの子も思いを出せるよう２人組で取り組む活動を取り入れた。教員は、普段から友達の考えに合わせることが多いE児とF児を意図的に２人組に設定する。教員は、学級全体に、色、形、貼る位置などについて、２人で相談して決めるよう提案する。**E児とF児も、初めは自分たちの製作に必要な道具を持ってくるなど、進んで準備をする。しかし、準備が終わり隣り合わせに座ると、互いに無言になって話が進まず、困った表情を見せる。**教員は、E児とF児に「どっちがいい?とか、こっちでもいい?とか聞くといいよ。」と聞き方を具体的に知らせる。**E児は「どっちを切りたい？」、「どっちの色がいい？」とF児に話し掛け、F児も「こっちがいいな。」などとやり取りをしながら進めていこうとする。**教員が互いの聞き方ややり取りの様子を認める言葉を掛けると、その後も**互いに思いを出し合ったり聞いたりしながら、一緒につくり進める。**でき上がると２人でこいのぼりを持ち、「先生できたよ！」とうれしそうにこいのぼりを教員に見せる。

６月、学級であじさいづくりをする際に、幼児同士で２人組を決めるように投げ掛けると、E児はF児を誘う。互いに話しながら色を決めたり、役割分担をしたりしながら、自分たちであじさいづくりを進める。

【分析】



たくましさを支える要因

[思い]（ゆらぎの際のプラスの気持ち）
・楽しそう　・やってみたい
[遊び・教材]
・相談が容易な活動
・これまでの経験でできる製作
[友達]
・互いに自分から発信する必要のある友達
[教員]
・思いを出し合えるような、活動人数の設定
・思いの聞き方を知らせる

たくましさとともに育つもの

学びに向かう力・人間性等

積極性
・課題を自分事として捉え、やってみようとする。

知識及び技能の基礎

・こいのぼりのイメージをもつ。
・切る、貼る、塗るといったこれまでの経験を生かす。

思考力・判断力・表現力等の基礎

・友達に伝わるように話す。
・つくったもので分かり合う。

育ちの広がり

・自分たちでできたという自信
・次の活動への意欲

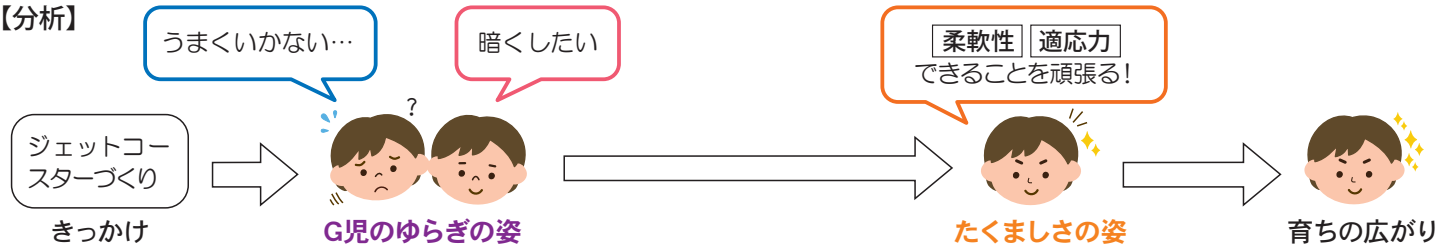
【考察】思いを出し合う機会をつくる

教員がねらいを明確にもち、幼児の実態を踏まえた２人組を設定したことで、E児とF児は、互いに思いを出し合って取り組むことができた。また、相談する内容を色や形、貼り方など分かりやすいものにしたことや、思いの出し方・聞き方を具体的に知らせたことで、２人が互いに積極性をもち、行動に起こしてつくり進めようとする姿につながった。

事例４　５歳児11月　柔軟性　適応力「できることを頑張るわ」

学級全体で取り組んでいる遊園地ごっこに向けて、ジェットコースターグループに所属しているG児。コースターの通り道を暗くしたいと、みんなで大きな黒いビニール袋を切り開こうとする。ビニールを切ることに苦戦しながら、なんとかやり遂げようとするが、何度やってもうまくいかない。**教員が手を添えようとすると「自分でやる。」と言い、苦戦しながら何度も挑戦している。**みんなが数枚切り終えるまで挑戦していたが、同じ仲間であるH児に「難しいよね。」と声を掛けられると、**「これは難しすぎる。Hちゃんお願い！僕はできることを頑張るわ。」と言い、みんなが切ったビニールを壁に貼る作業をする。**うまく切るI児の姿を見て、「Iちゃんすごいな。できたのちょうだい。」と言い、I児から切ったビニールを受け取ると、どんどん貼り付けていき、最後までつくり上げる。

【分析】



たくましさを支える要因

[思い]（ゆらぎの際のプラスの気持ち）
・暗くしたい（目的を果たしたい）
[遊び・教材]
・これまで扱ったことのある教材
・必要なものを自分で選べる製作コーナー
[友達]
・同じ目的に向かっている友達
・共感してくれる友達
[教員]
・一人一人の考えを尊重する
・自分たちでつくり上げようとする姿を見守る

たくましさとともに育つもの

学びに向かう力・人間性等

柔軟性　適応力
・困難をそのままにせず、新しい考えで対応しようとする。
・グループの一員として、自分にできることで力を発揮しようとする。

知識及び技能の基礎

・自分の得意なこと、友達の得意なことを知っている。

思考力・判断力・表現力等の基礎

・自分なりにできることを考え、気持ちを切り替えて取り組む。

育ちの広がり

・自分も力を出せたという満足感・達成感
・暗くするという目的を果たせた達成感

【考察】一人一人が力を発揮できるような機会をつくる

遊園地ごっこという行事に向かって始まったグループ活動の中で、G児は自分のできることを頑張ると決めて、友達に伝えた。その姿は困難を乗り越えず諦めた姿にも見えるが、新しい考えを見いだして臨機応変に対応した、たくましい姿であると捉えた。

グループ活動においては、幼児がそれぞれに力を出し合い共通の目的に向かっていることが大切であり、教員は一人一人のもっている力を伸ばしていく機会をつくることが大切である。

今後は、G児には自分のしたいことを自分の力で実現できるような技能面での援助が必要である。このように、個々に応じた育ちの広がりを意識し援助していくことが大切である。

事例 ～育ちの広がり～

事例５　４歳児１月　前向きさ　粘り強さ　積極性　→“共感性”「私も最初はそうだったよ」

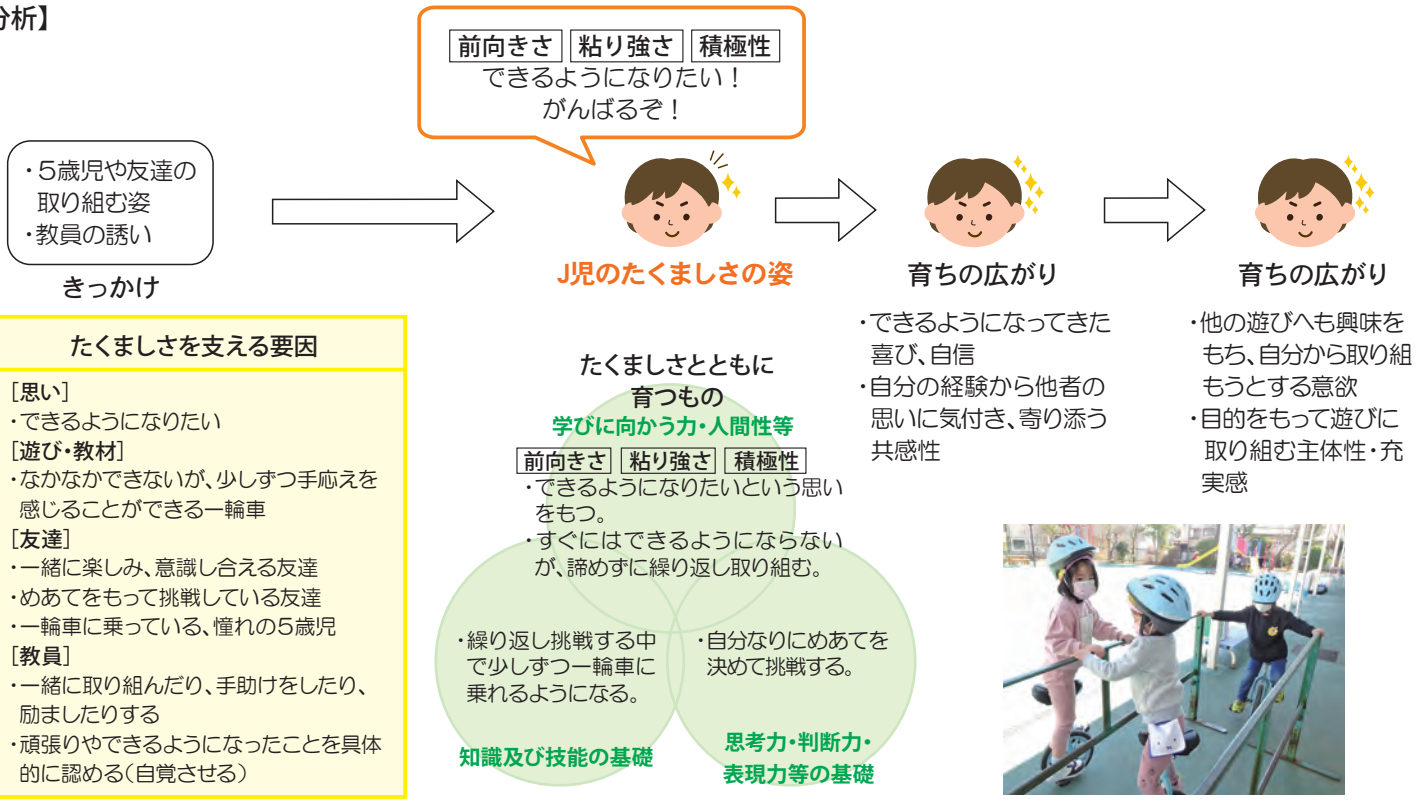
12月中旬、５歳児の刺激を受け、数人の幼児が一輪車に取り組み始める。教員が、これまでもしたいことがなかなか見付からなかったJ児を誘うと、興味をもち挑戦を始める。教員は、一緒に取り組みながら、手助けをしたり励ましたりする。少しバランスを取れるようになり、J児は、「今少し乗れたよね！」とうれしそうにする。教員もうれしさに共感し、一緒に喜ぶ。

翌日以降も、園庭に出るとすぐに一輪車に向かい、友達と一緒に、毎日挑戦を繰り返す。1月の冬休み明けも、自分なりにめあてをもって繰り返し取り組み、上達する。少しできるようになる度に「見て見て。」と教員に見せる。教員は、頑張りやできるようになったことを具体的に認め、励ましたり、次のめあてをもてるように言葉を掛けたりする。

1月中旬、一輪車に挑戦を始めた友達がなかなか思うように乗れずにいる様子を見て、J児は、「私も最初はそうだったよ。」と言葉を掛け、励ます。

一輪車の挑戦を始めたあと、コマや縄跳びなど、自分から他の遊びにも取り組むようになる。ある日の朝、「ああ、やりたいことがいっぱいで忙しい！」とうれしそうに言いながら遊び始める。

【分析】



【考察】育ちの広がりを意識する

J児は、一輪車に挑戦する中で感じた手応えが自信となり、さらに挑戦したいという思いにつながった。なかなかできるようにならない一輪車ではあるが、繰り返し取り組む中で、J児にゆらぎは見られず、できるようになりたいという思いをもって、諦めず挑戦するたくましい姿が何日も続いた。

また、できるようになってきたうれしさや、できなかったときの難しさなど、取り組む中で感じた様々な思いが、同じめあてに向かって頑張る友達への共感につながった。さらに、一輪車での経験がコマや縄跳びに自ら取り組むなど、これまでJ児にあまり見られなかった主体的な姿につながった。一人一人が取り組む姿を励まし、支え、認める教員の援助が大切であり、一つ乗り越えた経験から、育ちが広がっていくことを意識して援助したい。

事例６　５歳児３月　粘り強さ　「まだまだつくるよ～」

学級全体で二人雛の雛人形づくりを経験した。つくり終えた後、K児は教員に「他の人形もつくりたい。」と伝えにくる。教員は翌日、製作コーナーに材料を用意し、K児に伝える。早速つくり始めたK児は、本物の雛人形をじっくり見ながら、「こんなものを持っている。」、「これはあの材料でつくれそう。」などと適した材料を選んだり、つくり方を考えたりしながら、丁寧につくる。教員は、必要に応じてK児と材料を探したり、技能面の手助けをしたりしながらK児の取組を支える。周りの友達は自分の遊びに取り組みながら、K児の様子を見に来て、「Kちゃんすごいね。」と声を掛ける。K児は「まだまだつくるよ～。」と数日かけて三人官女、五人囃子、右大臣・左大臣を全て自分の力で丁寧につくり上げた。

【分析】

学級で経験した雛人形づくり

きっかけ

粘り強さ
本物みたいにつくりたい！
最後まで完成させたい！

K児のたくましさの姿

育ちの広がり

・自分で決めた目的に向かい、やり遂げた満足感・達成感

たくましさを支える要因

［思い］
・もっとつくりたい　・雛人形づくりが楽しい
［遊び・教材］
・これまでの遊びの経験
・めあてとなる本物の雛人形
・自分で必要なものを自由に選べる環境
・じっくり取り組める時間
［友達］
・取組に関心をもち、認めてくれる友達
［教員］
・材料や用具などイメージが実現できる環境の設定
・粘り強く取り組む姿を支え、認める援助

自分でめあてをもって取り組み、乗り越えてきた経験

たくましさとともに育つもの

学びに向かう力・人間性等
粘り強さ
・絶対やりたいという強い思いをもち、最後まで取り組む。

・これまでの経験を生かし材料や用具を扱う。
知識及び技能の基礎

・本物の雛人形を見ながら本物らしく表現しようと工夫する。
思考力・判断力・表現力等の基礎

【考察】経験の積み重ねを大切に

２年間の集大成の製作活動として教員が投げ掛けた雛人形づくりから、K児は、さらに自分で目的をもち、イメージを広げて粘り強く取り組む姿があった。このK児のたくましさを支えた要因を考えたとき、この場面における要因だけではなく、これまでの園生活で積み重ねられた経験が大きな要因として根底にあった。K児が自分のしたいことを自分で選び、主体的に遊びに取り組みながら様々なことを乗り越えてきた経験が、２年間の育ちとして今回のたくましさにつながった。

２年間を通して

様々な事例を本園の長期指導計画の発達の期と照らし合わせ、以下のようにまとめた。

		4歳児			5歳児		
発達の期		［前期］安心・自己発揮	［中期］自己実現	［後期］仲間意識	［前期］安心・自己充実	［中期］仲間との実現	［後期］仲間との充実
どんな時ゆらぐ？		・園生活への不安を感じるとき ・自分のペースで過ごせないとき	・思い通りにしたいとき ・気になる友達ができるとき ・思いの違いを経験するとき	・学級みんなで同じ目的に向かうとき ・友達関係が広がるとき ・進級への期待と不安を感じるとき	・進級した喜びと不安を感じるとき ・個々の目的に挑戦するとき ・自他の特徴や違いを感じるとき	・友達と共通の目的に向かうとき ・互いの違いを受け止めようとするとき	・学級の中で自分たちでよりよくしようと思いや考えを出し合うとき ・就学への期待と不安を感じるとき
育てたいたくましさ		積極性・前向きさ・柔軟性・回復力・粘り強さ・適応力・自己主張・自己調整　など					
ゆらぎに対して願う姿		・幼稚園で安心して過ごす ・幼稚園で「好き」を見付ける ・興味をもって関わってみる	・じっくり取り組む ・興味を広げる ・みんなで過ごす楽しさを知る ・友達に関心や親しみをもつ	・みんなの中で自分を発揮する ・つながりや関わりを喜ぶ ・意欲的に行動する	・自分なりに遊びを実現させる ・目的に向かって力を発揮する ・伝え合って進めようとする	・仲間の中で自分の力を発揮する ・力を合わせる楽しさや達成感を味わう ・友達のよさに気付き、つながりを感じる	・よさを生かし合いながら進める ・協力してやり遂げる充実感を味わう ・よさを認め合い、つながりを深める
たくましさを支えるために	遊び	・「自分のもの」、「自分でできる」が保障されている遊び ・好きな遊びを見付けられる環境	・様々なことを自分なりに試すことができる遊び ・友達と一緒に遊ぶ楽しさが感じられる遊び	・同じイメージの中でつながりを楽しめる遊び	・自分(たち)なりに目的をもてる遊び ・少し難しいことへ挑戦できるような遊び	・仲間の中で自分の力を発揮した実感がもてる遊び	・これまでの経験を生かし、自分たちで考えを出し合える遊び
	友達の存在	・同じ場でそれぞれの楽しみ方をする友達 ・同じ動きを楽しむ友達	・楽しそうなことをしている友達 ・互いに自分の思いを出し合える友達	・一緒に取り組み、つながりを楽しめる友達	・互いの思いに気付き、伝え合うことのできる友達	・互いの力を理解し合い、分かり合える友達 ・自分と違う考えをもった友達	・互いのよさを生かし合える友達 ・自分たちで解決策を出し合い進めていくことができる友達
	教員の援助	・園生活の安心感と教員への親しみをもてるようにする ・一人一人のペースを大切に、あるがままを受け止める	・一人一人の思いに共感し、実現できるようにする ・教員が仲間になり、友達と関わる楽しさに共感する ・相手にも思いがあることに気付けるようにする	・みんなの中で自分なりの楽しさを発揮できるようにする ・学級の様々な友達と関わる楽しさを味わえるようにする ・学級みんなで取り組む楽しさを味わえるようにする	・考えたり工夫したりして力を発揮しようとする姿を認める ・一人一人が自分のよさや自信を自覚できるように関わる	・仲間の中で、一人一人の力が生かされるようにする ・仲間でやり遂げる達成感が味わえるようにする	・自分たちで相談したり解決したりして進めようとする姿を認める ・一人一人の力やよさを強調し、つながりが深まるようにする

研究のまとめ

幼児の姿から学んだこと

基盤となるものは“主体性”と“安心感”

幼児が困難を乗り越えようとするたくましい姿には、「やってみたい」という思いをもち行動しようとする“主体性”が根底にある。そして、幼児が自分のやってみたいことに取り組むためには、いつでも幼児のことを受け止めてくれる教員の存在、安心して自分を出せる環境や人間関係などの“安心感”が基盤となっている。

「ゆらぎ」は乗り越えるチャンス！

幼児のゆらぎの姿が見えてきたことで、そこにはプラスの気持ちとマイナスの気持ちの両方で揺れ動いている葛藤が見られた。幼児は心のゆらぎを乗り越えることで、たくましさが育ち、新しい自分に出会える。幼児が自分の心と向き合う姿を大切にしたい。

遊びの魅力や面白さが大切

幼児は、遊びの中でどんな困難や葛藤があっても、そこに、遊びの楽しさや面白さ、友達の楽しそうな姿があることで、マイナスの気持ちよりもプラスの気持ちが上まわる。遊びのもつ魅力が、たくましさを支えている。

たくましさの先に広がる育ち

心のゆらぎを経験し、乗り越えた幼児は、たくましさが育つと同時に、乗り越えられたことによる自信や満足感などを味わっている。また、その先には、同じようにゆらいでいる友達への共感性、更なる主体性や意欲などの育ちが広がる。

また、新たな困難に直面した際に、自分で乗り越えようとするだけでなく、友達と互いの力を出し合ったり、よさを生かし合ったりして、一緒に乗り越えようとする協同性にもつながっていく。

教員の援助や役割について

幼児の心を見つめる

たくましい幼児を育成するためには、幼児がどのような思いでゆらいでいるか、何を乗り越えようとしているかを丁寧に読み取り、受け止めていくことが大切である。また、個に応じて乗り越えてほしいことや乗り越えられそうなことを捉え、たくましさを支える要因を多角的に考えていくことが必要である。

おせっかいな援助は卒業！

幼児が困難を感じる場面に対して、教員が援助しすぎたり答えをすぐに教えたりしてスムーズに乗り越えられるよう整理するのではなく、見守る援助を大切にしたい。幼児が自分の心と向き合ったり十分考えたりする時間を保障し、幼児自身の乗り越える力を信じる。個に応じてどこまで援助するのかを見極め、幼児自身が乗り越えられたという実感がもてるようにする。

たくましさだけを育てているのではない

本研究では、たくましさとともに育つものを、３つの資質・能力からも捉えたことで、一つの乗り越える場面においても、様々な力が総合的に育つことを再認識することができた。また、幼児のたくましさの姿から、それがこれまでの経験とどうつながってきたのか、これからどう育ってほしいのかといった経験の積み重なりが大切であることも分かった。経験の積み重ねを意識し長期的な見通しをもって援助することが大切である。

御指導いただいた先生

聖徳大学　教授　河合　優子 先生
聖心女子大学　非常勤講師　赤石　元子 先生

研究に携わった教職員

園　長／宮田　宏子
教　諭／本多　萌(育休)
介助補助員／石川　直子
管　理　員／松本　緑
主 任 教 諭／杉政亜希子
支　援　員／渡邉カオル
介助補助員／椎名久美子
管　理　員／佐藤　益子
教　諭／小川　貴子(育休代替)
介助補助員／佐藤　ゆみ
事 務 補 助／小平美由紀
介助補助員／髙橋　明美
事 務 補 助／浜岡百合子
〈令和４年度〉
教　諭／宮坂　陽果